

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 廣 澤 愛 子

論 文 題 目 被虐待児・者に対するイメージを用いた心理療法の
治療プロセスモデルの構築

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科教 授 伊藤 義美

委 員 名古屋大学大学院環境学研究科教 授 唐沢 穰

委 員 名古屋大学大学院環境学研究科准教授 鈴木 敦命

委 員 大阪大学大学院人間科学研究科教 授 老松 克博

論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

本論文は、被虐待児・者に対してイメージを用いた心理療法の一般的な治療プロセスモデルの構築を緻密に試みている。被虐待児・者に対してイメージを用いる心理療法の特徴を明確にして一般的な治療プロセスモデルを構築し、治療プロセスの促進要因と阻害要因を解明している。研究方法として、事例研究が抱える客観性の乏しさという手法上の課題の解決を工夫し、三段階の事例研究法を用いている。

第1章では、先行研究の概観から被虐待児・者への支援課題を特定し、イメージを用いた心理療法の特性を示している。第2章では、先行研究の課題を踏まえて本論文の目的と方法を述べている。第3章では、グラウンデッドセオリー法で用いるコード化とカテゴリー化の手続きを使い、典型事例（身体的虐待を受けて解離症状を呈した6歳男児）の分析から治療プロセスモデルを生成している。具体的には心理療法プロセスの記録から、①被虐待体験に関する語り②イメージの作用③治療者の治療的役割④クライアントと治療者の治療関係⑤精神症状に該当する箇所を抽出し、コード化とカテゴリー化の作業を合議制によって行い、各特徴を捉えている。被虐待体験に関する語りは、「被虐待体験を語らない時期」「語りの生成期」「語りの変容期」「語りの再構成期」という4段階を辿ることと、各段階における①イメージの作用②治療者の治療的役割③治療関係及び④精神症状の特徴を明らかにしている。

次に、第4章では別の典型事例（身体的虐待を受けて暴力性の問題を呈した12歳女児）を用いて同じ研究手続きでモデルを検証し、第5章において治療転帰不良事例も含めた12事例（治療転帰良好事例6例と不良事例6例、青年・成人を含む）の心理療法過程を用いてモデルを精緻化している。こうして一部修正をしながら治療プロセスモデルの一般化可能性を検証している。第6章の総括的考察では、治療プロセスモデルを提示し、被虐待体験の語りの変容段階（「語らない時期」を「語りの準備期」に修正）と、各段階における①イメージの作用②治療者の治療的役割などの4カテゴリーの細かな特徴を示している。また治療プロセスの促進要因と阻害要因から、治療転帰に係わる要件に①ラポール成立後に被虐待体験を語る②語りの変容期に死と再生という大きな変容が生起することなどの3点をあげている。さらにこの治療プロセスモデルは、被虐待児・者との心理療法にイメージを用いる際の参照枠として機能し、治療プロセスの査定や軌道修正の指標になるとしている。

受けた虐待の内容・程度やイメージを用いる心理療法の種類によって治療プロセスなどに違いがある可能性があるが、これらは今後の研究課題だと考えられる。

以上のように、本研究は可能な限り客観性への工夫をこらしたうえで、三段階の事例研究法によって、被虐待児・者に対するイメージを用いた心理療法の一般的な治療プロセスモデルを緻密に構築し、心理療法の実践研究の有益な参照枠を与えたという点で心理学の発展に大きく貢献した。よって、本論文の提出者廣澤愛子さんは博士（心理学）の学位を授与される資格があるものと判定した。